

(26) 以下の通り訂正いたします。

## P500 発表者の変更

誤

305) 看護大学2年生と4年生における看護職の捉え方とその関連要因

○上野和美<sup>1</sup>、片岡 健<sup>2</sup>、松浦江美<sup>1</sup>、藤本裕二<sup>3</sup>、  
中村真理子<sup>4</sup>、藤野裕子<sup>5</sup>、楠葉洋子<sup>1</sup>

<sup>1</sup>長崎大学大学院、<sup>2</sup>広島大学大学院、<sup>3</sup>佐賀大学医学部看護学科、<sup>4</sup>福岡女学院看護大学、<sup>5</sup>沖縄県立看護大学

### 【目的】

全ての臨地実習を終了した4年生と基礎的実習のみを終了した2年生の看護職の捉え方の比較とその関連要因を検討した。

### 【方法】

7大学の看護学生2年生474名、4年生453名を対象に自記式質問紙調査を行い、2年生421名、4年生425名を分析対象とした(調査未完了者、男性、25歳以上を除外、有効回答率91.1~94.0%)。調査項目は、基本属性、職業モデルの有無、看護職の捉え方(「看護師を尊い仕事だと思うか」について「1.非常にそうだ」~「5.全く違う」の5件法)、特性的自己効力感(成田,1995;23項目5件法)、社会的スキル(菊池,1988;18項目5件法)、Sense of Coherence(以下SOC)(戸ヶ里,2008;3項目7件法)を使用し、分析はMann-Whitney U検定とspearman相関係数を用いた。対象学生に研究の趣旨および方法、参加の任意性や拒否・中断により不利益を被らないこと、調査票は無記名とし、結果は数値化して処理を行うため個人を特定しない、研究以外の目的では使用しない、結果の公表等について文書および口頭で説明した。A大学の倫理委員会の承諾を得て実施した。

### 【結果】

対象者の属性は、2年生の平均年齢は19.9歳、4年生の平均年齢は21.7歳であった。看護職の捉え方の合計平均点(SD)は、2年生が2.48(0.82)点、4年生が2.36(0.89)点で、4年生の方が有意に低かった(p=0.01)。特性的自己効力感、社会的スキル、SOCの各合計平均点(SD)は、2年生が順に70.32(10.69)点、57.16(10.24)点、14.13(2.86)点、4年生が順に73.53(12.06)点、60.28(9.63)点、14.98(3.07)点で、全てにおいて4年生の方が有意に高かった(p<0.001)。職業モデルの有無による看護職の捉え方は、2年生では有意な差は認められなかった(p=0.06)が、4年生では有意な差が認められた(p=0.02)。2年生における〈看護職の捉え方〉は、〈特性的自己効力感〉〈社会的スキル〉と弱い相関があり(p=0.02)、4年生では、〈特性的自己効力感〉〈社会的スキル〉〈SOC〉全てと弱い相関があった(p=0.01~0.002)。

### 【考察】

それまで漠然と描いていた「看護職」が、多くの実習を経験することで職業モデルと出会い、そのモデルとなる人を目指すことで自身の看護職の捉え方が一致していくと考える。また人生経験を通して後天的に獲得されると言われているSOCは、4年生の方がこれまでの実習や学習過程での豊富な経験からストレス対処行動を獲得し、同時に自己効力感を高めることに繋がれていると思われる。そのため、短期である2年生の実習時から職業モデルの形成を意識した教育を行い、看護職の捉え方が一致していくような関わりが求められる。

正

305) 看護大学2年生と4年生における看護職の捉え方とその関連要因

上野和美<sup>1</sup>、片岡 健<sup>2</sup>、松浦江美<sup>1</sup>、藤本裕二<sup>3</sup>、  
中村真理子<sup>4</sup>、藤野裕子<sup>5</sup>、○楠葉洋子<sup>1</sup>

<sup>1</sup>長崎大学大学院、<sup>2</sup>広島大学大学院、<sup>3</sup>佐賀大学医学部看護学科、<sup>4</sup>福岡女学院看護大学、<sup>5</sup>沖縄県立看護大学

### 【目的】

全ての臨地実習を終了した4年生と基礎的実習のみを終了した2年生の看護職の捉え方の比較とその関連要因を検討した。

### 【方法】

7大学の看護学生2年生474名、4年生453名を対象に自記式質問紙調査を行い、2年生421名、4年生425名を分析対象とした(調査未完了者、男性、25歳以上を除外、有効回答率91.1~94.0%)。調査項目は、基本属性、職業モデルの有無、看護職の捉え方(「看護師を尊い仕事だと思うか」について「1.非常にそうだ」~「5.全く違う」の5件法)、特性的自己効力感(成田,1995;23項目5件法)、社会的スキル(菊池,1988;18項目5件法)、Sense of Coherence(以下SOC)(戸ヶ里,2008;3項目7件法)を使用し、分析はMann-Whitney U検定とspearman相関係数を用いた。対象学生に研究の趣旨および方法、参加の任意性や拒否・中断により不利益を被らないこと、調査票は無記名とし、結果は数値化して処理を行うため個人を特定しない、研究以外の目的では使用しない、結果の公表等について文書および口頭で説明した。A大学の倫理委員会の承諾を得て実施した。

### 【結果】

対象者の属性は、2年生の平均年齢は19.9歳、4年生の平均年齢は21.7歳であった。看護職の捉え方の合計平均点(SD)は、2年生が2.48(0.82)点、4年生が2.36(0.89)点で、4年生の方が有意に低かった(p=0.01)。特性的自己効力感、社会的スキル、SOCの各合計平均点(SD)は、2年生が順に70.32(10.69)点、57.16(10.24)点、14.13(2.86)点、4年生が順に73.53(12.06)点、60.28(9.63)点、14.98(3.07)点で、全てにおいて4年生の方が有意に高かった(p<0.001)。職業モデルの有無による看護職の捉え方は、2年生では有意な差は認められなかった(p=0.06)が、4年生では有意な差が認められた(p=0.02)。2年生における〈看護職の捉え方〉は、〈特性的自己効力感〉〈社会的スキル〉と弱い相関があり(p=0.02)、4年生では、〈特性的自己効力感〉〈社会的スキル〉〈SOC〉全てと弱い相関があった(p=0.01~0.002)。

### 【考察】

それまで漠然と描いていた「看護職」が、多くの実習を経験することで職業モデルと出会い、そのモデルとなる人を目指すことで自身の看護職の捉え方が一致していくと考える。また人生経験を通して後天的に獲得されると言われているSOCは、4年生の方がこれまでの実習や学習過程での豊富な経験からストレス対処行動を獲得し、同時に自己効力感を高めることに繋がれていると思われる。そのため、短期である2年生の実習時から職業モデルの形成を意識した教育を行い、看護職の捉え方が一致していくような関わりが求められる。